富士山・大根・2児の父（FD2）。

新 渡辺（わたなべ）ふじお

富士雄

渡辺ふじお物語 2

「がんばれ　大城」

国立小児病院での大城の手術の日程が決まった。病院は完全看護のため、親でも付き添うことはできない。それまで片時も母親と離れたことのなかった大城。ふじおと敦子が病室から出ていこうとすると、大城はベッドの上でくるりと背を向け、体を震わせた。やはり、一人にされるのが不安でたまらないのだ。敦子が「子ども心に泣き顔みせないよう、がまんしてるのよ」と泣きそうな声で言う。心配をかけまいとする我が子の気持ちを思うと、ふじおは涙が止まらなくなった。

それから三週間にわたる一家の戦いが始まった。

手術の日。ベッドに乗せられ、手術室に入っていく大城の小さな手を握り、ふじおも敦子も必死になって手術の成功を祈った。手術室から出てくるまでの数時間が、まるで一日のように長く、重苦しく感じられた。

「目が見えない！」手術が終わり、両目を覆われた大城が麻酔から醒めた時、思わず叫び泣きじゃくった。入院してから一度も見せることがなかった涙だった。ふじおは、腹の中で抑えようのない怒りと格闘していた。このときほど、自身の運命を呪ったことはない。

大城の手術の成功を真心から祈ってくれた友人たちのもとへ戻った。「大城が、愛する息子が、我が家にチャンスをくれたと思います。家族で心を合わせ、必ず乗り越えてみせます」と、いつもと違う、真剣な顔で語り始めていた。

「灯台下暗し」

ふじおの生活は、大城の病気をきっかけに、大きく変化していった。自分たちが住んでいる住居や周辺環境について関心を持ち、あれこれ考えるようになった。

ふじおの住まいは、青梅街道沿いのマンションの十階にある。昼も夜も、車の行き来が激しく、大量の排気ガスが撒き散らされていた。調べてみると、アレルギー性の喘息の原因には、粉塵（ほこり）、排気ガス、花粉などがあげられていた。大城の喘息の原因は、周辺環境の空気の汚れであることは間違いなかった。

とはいえ、社宅住まいのふじおたちは、住居環境が悪いからといって自由に引っ越すことができないのが現実。ただ、毎日、いつ良くなるか知れない病気と戦い、苦しんでいる大城の姿を目にすると、何か自分にできることはないのか――と、思わずにはいられなかった。

そうした事情は、ふじおの家族だけではなかった。近所や杉並区などのような都会に住む住民共通の悩みである。また、住む環境が整わず、子どもを持つ家族が地域外へ引っ越していく光景も珍しくなく、過疎地のように子どもの数が激減していくのが小中学校の実態であった。生徒数が一定数を下回れば廃校になり、通っていた生徒が遠くの学校へ転校しなければならない事態も起こりえた。

学校の問題だけではなかった。夜中まで公園でたむろする中高生の姿。幼い子どもを持つ親には、そうした光景に何か危険なものを感じてしまう。青少年を狙った犯罪が後を絶たない中、不審者、変質者が出没する場所が増えている。はたして、そうした状態を放置していいのか。地域全体で、子どもを守っていくことが必要ではないか。ふじおはそうしたことを肌身で感じるようになっていた。

つづく

渡辺ふじお後援会討議資料